

私立幼稚園の“体育外注”問題—大阪府A市14の私立幼稚園に聞きました—

(206号 1992.4)

大阪府A市14の私立幼稚園に聞きました

ア	週に1回エアロビクスをする。(外からインストラクターをよぶ)
イ	体育は週に1回YMCAで行う。オペレッタや表現活動を重視。冬ははだか保育。
ウ	週に2回YMCAで体育遊びを行う。本物の音楽を聞かせるため、一流の音楽家を招く。
エ	情操教育を重視。お茶の先生を招く。週に1回体育の先生を外からよぶ。
オ	園が広いので、サーキットを作り、外から体育の先生をよぶ。週に2回、スイミングのインストラクターをよび、温水プールで指導してもらう。
カ	体育の先生を外から招いて、体育遊びを行う。(他3園)

上の表を見ると体育を民間のスポーツ産業に委託している幼稚園が14園のうち、10園もあることがわかります。

子どもの数が減少している現在、いかにして、保護者にアピールするかが、幼稚園にとって大きな問題となってきます。そこで、体育、音楽、図工などのいわゆる、芸能教科で、目玉商品を作るのがカギとなるようです。

保護者にとっては、家に帰ってから、わざわざ民間の教室に行かせるよりも、時間的にも経済的にも助かるというメリットがあります。

民間のスポーツ産業にとっては、卒園しても、子どもとの関係をつなぐことができ、広い意味では、生涯スポーツがうたわれている昨今の、“小さなお客さん”となります。

社会での体育に対するイメージが変化し、体育という教科の存在根拠が問われている時期です。この幼稚園の“外注問題”が、小学校体育専科(東京)の増加、中学校選択制、高校多様化問題、大学教養体育解体問題へとつながっていくのかもしれませんが。みなさんはこの問題をどう考えられますか。